平成21年12月　vol. 15

いわき市立総合磐城共立病院

地域医療連携室だより

「患者さん中心」の地域医療機関のネットワークづくりを目指して
――― 先ず、チーム医療推進のための意識改革を ―――

いわき市立総合磐城共立病院　副院長兼看護部長　坂　元　和　子

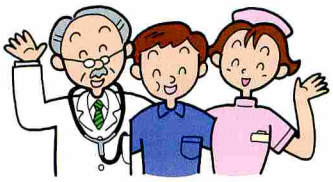
今年度４月より副院長兼看護部長に就任いたしました坂元と申します。地域の医療機関の皆様、また当院地域医療連携室に登録いただいております登録医並びに登録医療機関の皆様には、平素より大変お世話になり心より感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

私は、共立病院に入職後、外科病棟・集中治療室(CTU)・脳外科病棟・小児病棟の師長として病棟管理を行い、副看護部長として５年間看護部長の補佐を務めました。業務担当副看護部長としての役割の他、接遇向上、医療安全室の一員としてクレーム対応や地域医療連携室などを担当して参りました。

＜連携室について＞

地域の中核病院、また急性期医療機関の役割を担う本院は、地域医療機関との連携を推進するために、平成17年に連携室に看護師を1名配置しました。連携室活動の一つとして病院訪問を計画的に行い、連携室に対する要望やご意見をお聞きし、できることから改善してまいりました。さらに、「当院での入院治療が必要な患者さんを待たせることなくスムーズに入院していただく」システムづくりを行うため、病床管理検討会を立ち上げ、新谷連携室室長と共に病床管理ルール、また退院調整システムを構築し地域医療機関の皆様のご理解、ご協力により「紹介率」「逆紹介率」が上がり、今年度９月に「地域医療支援病院」の承認を受けることができました。連携室紹介率も昨年と比較しますと44％増え(月165人増)、8月から正面玄関右側(内科外来前)に連携室を独立させました。前日までにFAXでご紹介いただきますと患者さんが来院する前に受診の準備がすべて終了しておりますので、手続きでお待たせすることなく、連携室のスタッフ(看護師長１名･看護師１名・事務２名)が直接受診科へご案内しております。どうぞ、ご利用ください。また、当院にお越しの際は、連携室へお立ち寄りください。狭い部屋ではありますが、連携室スタッフ一同、心より歓迎いたします。まだまだ、数多くの問題を抱えておりますが、地域医療支援病院としての役割を発揮し「地域で取り組む、患者さん中心の医療」の発展に向け、ネットワークづくりに積極的に取り組んでまいります。

〈連携室スタッフ〉



【いわき市立総合磐城共立病院　地域医療連携室】
電　話　0246(26)2250(直通)　ＦＡＸ 0246(26)2119
ＵＲＬ　http://www.iwaki-kyoritsu.iwaki.fukushima.jp
E-mail　kyoritsu@iwaki-kyoritsu.iwaki.fukushima.jp

＜副院長兼看護部長として＞

TQM委員会の委員長として、「患者さん・ご家族の要求に合った医療の提供」を目指し、診療局・看護部・薬剤部・検査部・他のコメディカル・事務部など医療に関わるすべての部門の委員で提案・協議・実施する組織的「質のマネジメント」のコーディネーターとして、体制づくりを行い「医療の質」の向上に繋げたいと考えます。TQMは全員参加の活動でありますが、質を達成するためにそれぞれの人がやるべきことをやることが一番大事なことです。

病院の理念である「慈心妙手」をいつも心に掲げ、チーム医療を推進するため各職種が、やるべきことをやることが必要です。そのために、現状の問題点を出し合い“よいプロセスがよい結果を生む”という「プロセス指向」の考えに基づき、仕組み・環境などについてPDCAサイクルを回し継続的改善が組織に浸透するよう働きかけていきたいと考えています。

今年度の活動として「職員喫煙アンケート」「禁煙外来の開設」「患者満足度調査」「接遇講演会」を実施いたしました。接遇講演会は「よく笑う人はなぜ健康なのか」をテーマに国立病院機構函館病院副院長の伊藤一輔先生をお迎えし、340名の職員が参加しました。「人間は心や感情から老化すること」「笑ったり泣いたりすることが感情の老化を食い止めること」「マイナスのストレスも泣いたり笑ったり感情を発散させることで免疫系が活性化し前向きに変わること」「とりあえず表情だけでも笑顔になれば免疫力が増す、口角を上げるだけで笑えること」など「笑いの効果」についてお話され有意義な講演会となりました。マザーテレサの「笑ってあげなさい。笑いたくなくても笑わなければだめよ。人間には笑顔がとても必要なの」と言う言葉が心に残り、「笑い」は患者さんにも私達医療従事者にも必要であることを実感しました。また、各部署でフィッシュ活動を行っています。皆で考えるボトムアップ活動が広がっています。

「笑顔は誰のものでもなく自分のものである。先ず、笑顔で応対」

＜看護部長として＞

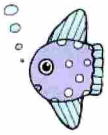
平成21年12月現在、看護部職員は729名です。平成20年12月から「７対１」の看護体制をとり、急性期病院の重症度・看護必要度に見合う人員配置ができました。「安心安全な医療の提供」には、職場環境が重要です。まだまだ充分な職場環境とは言えませんが、維持していくことが次のステップに繋がると考えています。職員の協力があって維持できています。何事も判断基準は「患者さんにとってどうか」をモットーに、組織運営をしています。

看護部目標（今年度よりバランスト・スコアカードを使用した目標管理を導入）

1．質の高い、安全･安心な看護ケアを提供します。（患者満足の視点・内部プロセスの視点）
2．看護職員の経営マインドを促進し、医業収支の改善に寄与します。（財務の視点）
3．病床の有効利用に貢献します。（財務の視点）
4．高い臨床実践能力を備えた人材を育成します。（学習と成長の視点）
5．はたらきがいのある組織づくりに取り組みます。（内部プロセスの視点）

最後に、常磐病院の後継医療機関も決まり、来年度から１市１病院として新たなスタートとなります。課題も山積みですが、「地域住民の健康を守る」ための体制づくりを職員一丸となって推進してまいります。地域の医療機関の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

〈看護部長室職員〉



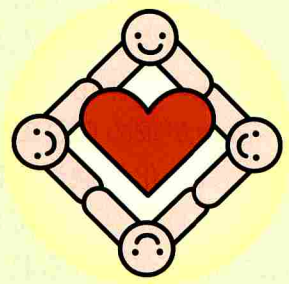
地域医療支援病院

当院は、数年前より、地域医療支援病院の申請に向けて活動してきました。

そして、懸案であった紹介率が、平成20年度に初めて60％を超え、申請のための準備が整いましたことから、平成21年７月28日付で、福島県に申請を行い、**平成21年9月8日付で、福島県知事より「地域医療支援病院」の承認を受けました。**

地域医療支援病院は、

○ 法令で定められている施設や医療設備の保有
○ 他の病院や診療所からの紹介患者に対する医療の提供
○ 病院施設、設備等の共同利用
○ 救急医療の提供
○ 地域の医療従事者の資質の向上を図るための研修



などを行うことにより、**地域医療の充実を担う病院として県知事が名称使用を承認する**ものです。

総合磐城共立病院では、これからもかかりつけ医を支援し、地域の医療機関との役割分担と更なる連携の強化に努めながら、いわき市のみならず、浜通りの相双地区や茨城県北部にわたる広範囲の地域医療の中核を担う病院として、医療の質の向上を図り、地域の皆さまにより良い医療を提供できるよう努力してまいります。

地域医療連携登録機関の掲示

総合案内前「地域医療連携登録機関一覧」を一新しました。

新たにご登録いただいた医療機関名を追加し、医科、歯科ごとに掲示しています。

尚、この掲示は、身近なかかりつけ医と当院医師とが役割分担のもと、連携して診療を行う**「地域医療連携」**を市民の皆様に広く理解していただくこと、また、連携登録医療機関と当院との連携関係の強化を目的としています。

ご来院された際は、どうぞご覧ください。

○地域医療連携登録機関数

地域医療連携登録機関		361
内　　訳	医　　科	233
	歯　　科	128

（平成21年12月15日現在）

診療科紹介

外来化学療法室

中央外来師長　中　野　とも子
外来化学療法室担当看護師　斎　藤　み　さ

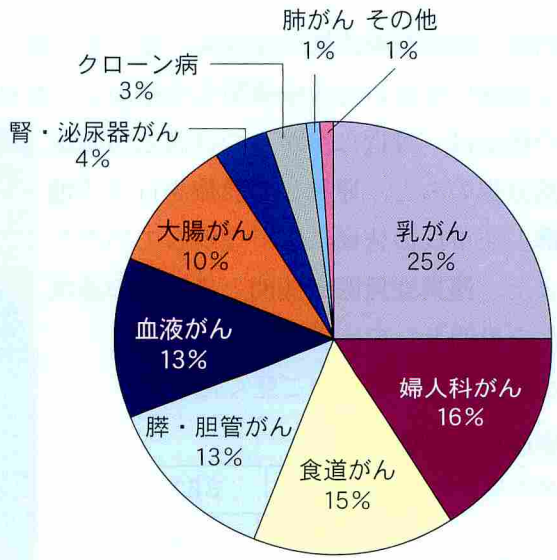
外来化学療法室は、平成21年１月に開設されました。それまで外来化学療法は採血室と同フロアーの点滴室で、一般点滴や、輸血と同じように行われていました。そのため、騒々しい、プライバシーが守れないなどの問題があり、落ち着いて化学療法を受けるには程遠い環境でした。またベッド数も少ないため待ち時間も長く、ベッドもほとんどが診察台で代用されていたため、化学療法の副作用でつらい思いをしている患者さんが長い時間横になっていることは苦痛であり、改善が求められていました。

開設された外来化学療法室は、外来化学療法専用でベッドが９床（うち２床はリクライニングチェアー）あり、ベッド毎にテレビ、冷蔵庫、カーテンがあるため、プライバシーを保ちながら安心して治療が受けられる環境になっています。また全ベッドが耐圧分散マットレスとなり体への負担が少なくなり、以前より楽になったと患者さんからも好評です。

３月からは薬剤師による無菌調剤が開始されました。薬剤師が無菌調剤を行うことにより清潔・確実に調剤が行われるだけでなく、薬剤師による抗がん剤の種類や量、副作用などのチェックも同時に行えるようになりました。また私たち看護師も、化学療法中の患者さんの様子を注意深く観察したり、自宅での副作用の様子を詳しく聞いたり、日常生活指導などの患者さんのケアに集中できるようになりました。平成21年１月から９月までの疾患別内訳（図１）をみると、約４割が乳がん・婦人科がんで女性の占める割合が高いため、カツラ装着を体験できるようにしたり、治療法の進歩により今後増えてくると思われる大腸がんの自己抜針指導などの充実を図っています。

４月からは電子カルテによる化学療法のレジメンシステムが導入されました。レジメンとは、簡単にいえば化学療法の処方箋です。レジメンは、その一つ一つが院内の医師や薬剤師によって審査され、合格したレジメンだけを患者さんに使用することになっています。さらに電子カルテは、患者さん個人に合った抗がん剤の量を自動的に計算し、誤って危険な量を処方すると、警告の表示が出るという仕組みになっています。レジメン審査と電子カルテ、この二つを併用することにより、抗がん剤の用量のミス、薬剤名の誤処方などを防ぐというリスク管理の仕組みが整い、安心・安全な化学療法を提供できるようになりました。

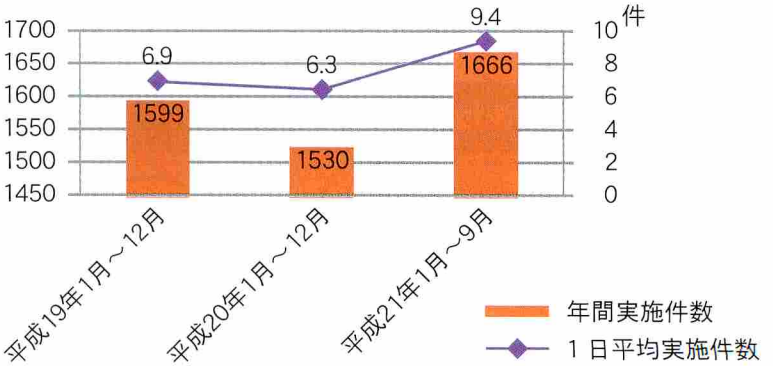
（図1）疾患別内訳　平成21年１月～９月



電子カルテはリスク管理だけでなく、医師、看護師、薬剤師、検査技師などが協力して医療を行うチーム医療にも役立っています。患者さんの状態や訴えなどの情報をリアルタイムで医療スタッフが共有できる伝言板ツールとして利用できるからです。患者さんの情報が様々な医療スタッフ間で共有されることは、スムーズで効率的なよりよい医療につながり、患者さんから信頼を得られるものと思われます。

外来化学療法室は開設以来、ハード面、ソフト面共に徐々に改善されてきました。しかし、平成20年には1530件（1日平均6.8件）であった外来化学療法は、今年に入ってから増加傾向にあり、9月までで1666件（1日平均9.4件）となり、既に去年を超えています(図2)。これに伴い、待ち時間の延長が新たな問題となっており改善が求められています。今後も様々な問題点を改善しながら、さらに安心・安全な化学療法を提供できるようチームスタッフ全員で努力していきたいと思います。

（図2）化学療法の実施件数



〈外来化学療法室スタッフ〉

診療科紹☺介

中　央　手　術　室

中央手術室看護師長
坂　本　美智子

当手術室は1976年11月に、当時東洋一のバイオクリーンルームが併設された手術棟が完成し、９室の手術室となりました。病院の1階に設置されており、毎年専門業者による精密清掃・消毒を実施しており、30年以上経過した現在でも表面付着菌・空中付着菌の問題はありません。

現在は、外科・産婦人科・脳外科・形成外科・呼吸器外科・小児外科・心臓血管外科・整形外科・泌尿器科・耳鼻咽喉科・眼科・口腔外科・救命救急・消化器内科の14科の手術に対応しています。中央手術室スタッフは、麻酔科医常勤６名と、看護師35名、看護補助者７名の総勢48名と中央外来・CTUに次ぐ大所帯となっています。年々の手術件数の増加に伴い、麻酔科には、月曜日から金曜日の午前あるいは午後に非常勤医師の応援をお願いしています。

人工関節置換術（バイオクリーンルーム）

平成20年の手術件数は5270件で、そのうち麻酔科管理の手術件数は3627件でした。平日は６列の手術枠の定期手術がありますが、常に手術枠はいっぱいの状態です。そんな状況の中ですが、平成20年の臨時・緊急手術は1516件ありました。最近はさらに、臨時・緊急手術が増加傾向にあり、手術室・麻酔科医・看護師の調整に苦慮しています。

麻酔科医は、平日と休日の日勤帯は当直体制をとっており、休日の夜勤帯は待機しています。看護師は、休日夜間の緊急手術に対応するために、３名の当直体制をとっており、全科の緊急手術に24時間対応しています。看護部はＡチーム（心臓血管外科・口腔外科・産婦人科）、Ｂチーム（整形外科2列・耳鼻咽喉科・形成外科）、Ｃチーム（呼吸器外科・小児外科・泌尿器科・眼科）、Ｄチーム（外科・脳外科・整形外科1列・消化器内科）の４チームがあり、各チームのリーダーとサブリーダーを１年固定とし、メンバーは３ヶ月ごとにローテーションしています。スタッフが、１年間で全チームが経験できるようにしています。このようなシステムのおかげで、常にどのような緊急手術に対しても迅速に対応できています。休日夜間に複数の手術が重なってしまう場合がしばしばありますが、そのような場合には、各科の医師が器械出し等の協力をしてくれます。また、異動となった新入スタッフの慣れない介助に対しても、麻酔科の医師をはじめ、各科の医師達の協力があります。手術室での新人教育は、物品や器械名を教えるだけでは教育にはなりません。専任教育担当者を中心とし、みんなで育てています。日々の各科のご協力に対して心から感謝しています。

手術室に配属になると、覚えることが多く誰もが必ず苦労します。過去は、各手術の準備物品の一覧表があっただけなので、手順について理解するのは大変でした。医療機器が進歩し、術式の変化に伴い、各科の統一された手術手順が必要になり、平成16年にはスタッフの協力を得て、各科の手術手順が完成しました。手順の変更があった場合には、随時修正をしています。手術手順は新人教育に大変役立っています。さらに、スタッフ個人が積極的に研修会などに参加し、スキルアップを図っています。

術前・術後訪問の重要性については、かなり前から提唱されていました。当院でも10年以上前から、科を限定して術前・術後訪問を開始していましたが、２年前からは定期手術の入院患者さんには全症例に術前訪問を実施しています。手術室に入室する前に手術室の担当看護師が挨拶をすることは、患者さんにとって必要なことだと思います。それでも、手術当日緊張した表情で患者さんは入室してきます。その緊張した患者さんをあたたかく迎え入れられるよう日々努力しています。短時間しか関われないからこそ、すべてのスタッフが心をこめて対応しています。現在、術後訪問は、術中から術後継続して観察が必要な患者さんのみに実施しています。今後、全症例に実施できるよう計画中です。

これからも手術室スタッフが一丸となって、患者さんが安心して手術を受けられるよう、また、いつでもスムーズに手術を受け入れられるよう努力していきたいと思います。

〈中央手術室スタッフ〉

診療科紹介

ＤＳＡ 心カテ室

DSA室副看護師長
石　川　桂　子

ＤＳＡ・心カテ室は、当院の副院長である市原利勝先生が昭和49年に心臓カテーテル検査を導入して以来35年の歴史があり、福島県浜通り～茨城県県北の中心的役割を担ってきました。主な検査・治療であるインターベンション治療（Interventional Radiology）は、血管及び非血管疾患の低侵襲治療として外科手術と同じ一つの方法として行われ、現在は、循環器科・消化器科・脳神経外科・救命救急科等が検査・治療を行っております。検査総数は、過去３年間において年平均1300件で、その内約87％を循環器科の虚血性疾患への心臓カテーテル検査や治療、下肢動脈塞栓症の治療が占めています。心臓カテーテル検査というと、穿刺部位からの出血防止のため翌朝までベッド上安静のイメージがありますが、医療技術の進歩により循環器科全体の約半数を橈骨動脈穿刺で行われるようになって（検査内容や患者さんによっても異なります）、術後早期に歩行可能となり患者さんへの負担が軽くなりました。

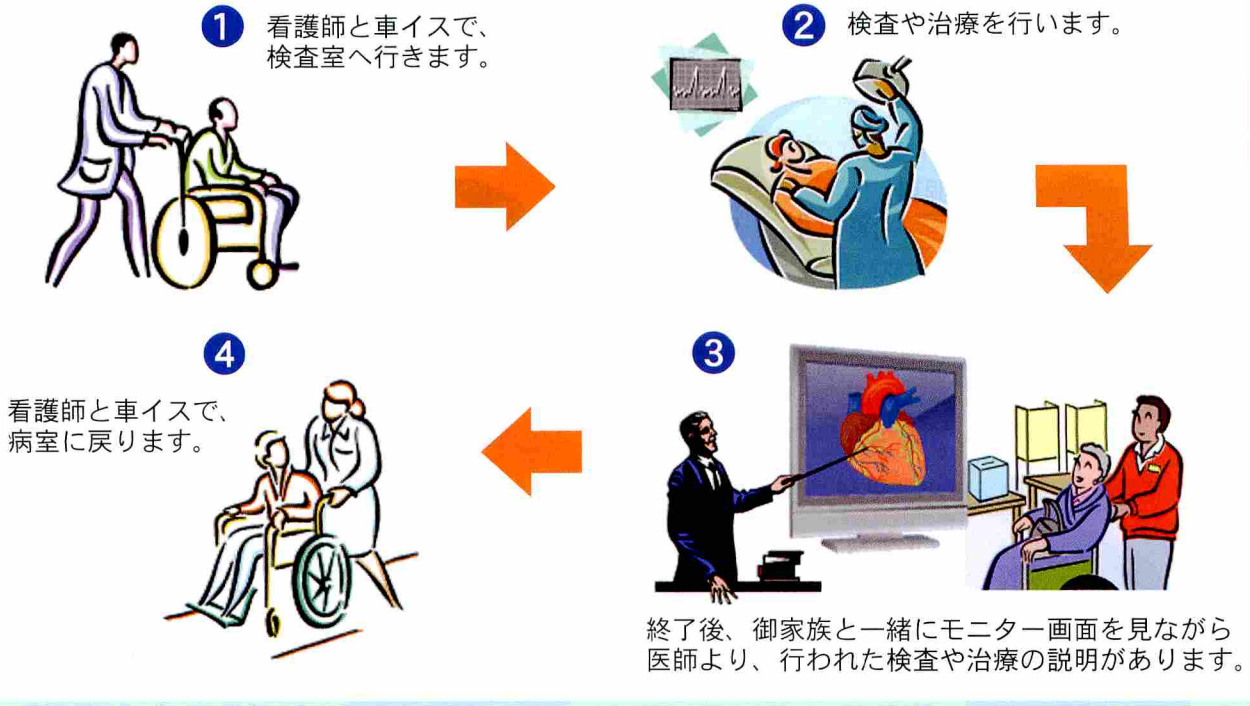
科　名	主な検査・治療
消化器科	肝癌等消化器癌の検査・治療（肝動脈塞栓療法，肝動注化学療法，ＣＴＡ，CTAＰ）など
脳神経外科	脳血管造影　脳動脈瘤の出血防止治療（コイル塞栓術）など
救命救急科	外傷による臓器損傷・骨折に伴う止血治療（ゼルフォーム・コイル塞栓術）など
循環器科	心臓カテーテル検査　ＰＣＩ・ＰＴＡ（ＰＯＢＡ，ＳＴＥＮＴ留置，ロータブレーター） ＥＰＳ　ＲＦＣＡ　IVCフィルター留置　経皮的中隔心筋焼灼術 ペースメーカー植込み術 体外式ペースメーカー・ＩＡＢＰ・ＰＣＰＳ挿入など

心カテ室のコメディカルの構成には、病院によって様々な体制がとられていますが、当検査室では看護師（常勤５人）、臨床工学技師（常勤４人）、診療放射線技師（常勤１人）、臨床検査技師で構成され、医師を含めた５部門が各々の専門技術を集結して、患者さんに安全な医療を提供出来るよう努めています。検査・治療前日には、カテ前訪問を行って質問にお答えしたり、要望を伺って患者さんの不安の軽減に努めています。又、毎朝業務前にはコメディカルが集合して、カテ前訪問の内容を基に患者カンファランスを開き、検査内容等の確認や患者さんの要望等の情報を共有し検討する機会を設けています。ここで行われている検査や治療はどれも大変緊迫感のあるものばかりで、コメディカル同士が協力し合わなければならない職場であると常日頃から感じています。そのため、週一回タッチ＆コールを行って“和”を深めていますが、そこからスポーツ精神のようなチームの結束力が生まれて、良い医療の提供に繋がればと環境作りを実践しています。さらに、２年前より臨床工学技師が参入したことにより、ロータブレーター（経皮的高速回転式粥腫切除術）、ＲＦＣＡ（経

皮的カテーテル心筋焼灼術）、ＩＶＵＳ（血管内超音波）等のデバイス（治療器具）の操作に習熟するスタッフが、医師と共に、より質の高い技術を提供出来るようになりました。

私達は、今後も地域の皆様や患者さんとの信頼関係を築き、安全で安心な医療を提供できるように、専門性を高める努力を行っていきたいと思いますので、宜しくお願い致します。

心臓カテーテル検査の流れ ※検査・治療の内容により、違いがあります
（橈骨動脈穿刺の場合）



ようこそ!! 新任医師紹介

耳鼻咽喉科
牛　来　茂　樹 医師

7月に東北大学病院から異動になりました。高校卒業以来、久しぶりのいわき市での生活を楽しんでいます。
病院業務に1日でも早く慣れて地域医療に貢献したいと思っています。よろしくお願いいたします。

麻酔科
林　　志　保 医師

8月から着任しました。高校時代はいわき市ですごしたのですが、ずいぶん変わったように思います。
早くいわき市になじんで、仕事もプライベートも充実させたいです。よろしくお願いいたします。

眼科
宮　澤　弘　史 医師

平成21年8月から眼科で勤務しております、宮澤弘史です。
平成9年に卒業してから眼科一筋です。前の職場の東北大学病院では、網膜硝子体疾患と未熟児網膜症の担当でした。
好きな言葉は「人間万事塞翁が馬」です。

産婦人科
若　木　　優 医師

今年の9月から産婦人科勤務となりました。
症例の多いいわき地区で精進しながら、少しでも産婦人科医療を支えていければと考えております。
なにとぞご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

整形外科
池　西　太　郎 医師

職員の皆様、はじめまして。池西と申します。10月より整形外科でお世話になっております。
2007年、長崎大学卒業、2007年4月～2009年3月まで、東北大病院で初期研修を経て現在に至ります。
まだまだ医師として未熟な点が多々あり、ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

耳鼻咽喉科
本　蔵　陽　平 医師

10月より赴任いたしました本蔵陽平（ほんくらようへい）です。
仙台医療センターで初期研修を終了し、卒業3年目・耳鼻咽喉科医1年目です。
ご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

脳神経外科
成　澤　あゆみ 医師

11月より赴任いたしました。他科の先生方にご協力をお願いすることも多いと思いますが、よろしくお願い申し上げます。

小児科
鵜　飼　友　彦 医師

11月より小児科でお世話になっている鵜飼友彦と申します。
卒後4年目になります。
未熟者ですがよろしくお願いします。

地域医療連携室業務時間
月～金　8：30～17：15

〒973-8555 福島県いわき市内郷御厩町久世原16番地 いわき市立総合磐城共立病院